短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇劇映画のみを重要視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には〈珠玉の短篇〉という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会史的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇劇映画には見られない別の優れた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後1時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1979年3月　**フィルムセンター**

★先着順にて定員239名に達し次第入館を締め切ります。開館は12時30分。他の特集上映とは全館入替え制になります。

一般200円　学生140円　小人100円

4月7日(土)　午後1時開映

―――春―――

緑は護られた

日本シネセル1977年作品

製作＝佐藤吉彦　脚本＝安藤巌　演出＝伊江敬和、安藤巌　撮影＝赤松竜彦、谷沢一義　音楽＝吉田征夫　解説＝加瀬次男　企画＝京成電鉄　カラー　30分

〈かいせつ〉

通勤客の増加と成田国際空港の開港を間近に控えて改良工事を行なわなければならなくなった京成電鉄の上野駅は、上野公園の地下にあるため、環境保全に関する是非の論争が起こった。その結果、工事関係地区にある264本の樹木の移植や由緒ある一本の老樹の保護など、自然を守るための最善の努力が注がれた。こういった細かい配慮と苦心の程を日時を追ってつぶさに描きだしたもの。

紅花はいま

東北映画1977年作品

企画＝東北電力株式会社　制作＝大木弘　脚本＝小島義史　演出＝大沢豊　撮影＝山本駿　南文憲　音楽＝吉田征夫　解説＝市原悦子　カラー　30分

〈かいせつ〉

山形県置賜、村山地方を中心に栽培されてきた紅花は、この地方特有の気象條件から優雅で鮮やかな色調をもった良質の紅がとれるため、〈最上紅花〉と呼ばれ、染料や口紅の原料として名声を高めた。この紅花の栽培は江戸時代中期が最盛期で、最上川を下って北前船で京都へ運ばれた。明治以降の化学染料の出現で、他の農作物に比べて収益のあがらない紅花は、その姿が殆ど見られないようになったが、本物の色を求めて染色工芸として地元に復活させたい熱意のたかまりと共に、織物や和紙の染料として、また薬品、自然食品として新らしく甦ろうとしている。この作品はこの紅花のふる里を訪ね、その歴史をひもときながら、美しい伝説の色をさぐったもの。

薄墨の桜

藤プロダクション1977年作品

製作＝工藤充　脚本・演出＝羽田澄子　撮影＝西尾清、瀬川順一、若林洋光　録音＝片山幹男　ネガ編集＝加納宗子　ナレーション＝香椎くに子　ギター演奏＝岩崎光治　題字＝松井春子　協力＝諏訪淳、岡本光司、伊藤雅則　カラー　41分

〈かいせつ〉

〈薄墨の桜〉というのは、岐阜県根尾川の上流にある推定樹令1300年余といわれている桜の古木で、継体天皇の御手植だとも言い伝えられている。人気のない山麓で爛漫たる花をつけているこの巨木が醸しだしている不思議な雰囲気にとりつかれた作者が、4年間の歳月をかけてこの不思議な雰囲気のよってきたるものが何であるかを映像によって表現しようとしたもの。

5月12日(土)　午後1時開映

―――鉄道―――

雪の行路

鉄道ジャーナル社1971年作品

制作・構成＝竹島紀元　撮影＝杉山昭親　竹島紀元、柿原勝彦　音響効果＝高橋雄次　編集＝高本信子　ナレーター＝細井重之　カラー　22分

〈かいせつ〉

4年後には蒸気機関車が日本の鉄路から全て消え去ってしまうという1971年の時点で、騰進する蒸気機関車のみが持つ鉄と油と煙の錯綜した熱っぽい魅力を映像表現として記録に残こしておこうという意図のもとに作られた作品。かつて日本最大の特急用蒸気機関車として東海道・山陽本線で活躍したC62型機関車が、雪の函館本線で重連で急勾配に挑む姿を中心に日本の蒸気機関車の〈生きた姿〉をダイナミックに描いたもの。

木曽王滝森林鉄道

長野営林局1976年作品

プロデューサー＝柳沢実　脚本・演出・撮影＝福島道夫　撮影助手・録音・照明＝伊藤久明　編集＝宮木辰夫　音楽＝山川繁　ナレーター＝鈴木瑞穂　カラー　44分

〈かいせつ〉

かつて全国で50数ヵ所に敷設されていた森林鉄道もその使命を終えて次々に姿を消して行ったが、この作品はその森林鉄道の中で最後まで走り続けた《木曽王滝森林鉄道》を記録したものである。筏流しで有名な木曽式運材法にかわって1917年に登場した木曽王滝森林鉄道は、近代的木材輸送の主役として、半世紀にわたって活躍してきたが、道路の発達、森林資源開発の進展とともにその役割を終え1975年3月31日に姿を消してしまった。この森林鉄道を中心に展開された林業発展の歴史と共に木曽谷の生活の変遷を映像で綴ったものである。

青函トンネル

鹿島映画社1978年作品

企画＝鹿島・熊谷・鉄建青函ずい道工事共同企業体　製作＝井上祐吉　脚本＝吉田巌　演出＝田代公幸　撮影＝大鹿隆一郎　カラー　34分

〈かいせつ〉

世界最長の海底トンネルである青函トンネルの掘削工事のうち本州側工事を記録したものである。この海底トンネル工事は破砕帯を含む複雑な地層と厖大な湧水との闘いであるため、いきなり本坑を掘り進めるわけにも行かず、まず岩盤の状況を確めるための先進導坑、次にトンネル掘削に必要な人員・機材やコンクリートの搬入、ズリの搬出などのための作業坑、この作業坑を足がかりにして高さ約10メートル、幅約11メートルの本坑と三つのトンネルを掘って行く。海面下140メートル、海底下100メートルにおける破砕帯を含む地層や湧水など、自然に挑む人間の逞しさを克明に描きだしたもの。

6月2日(土)　午後1時開映

―――伝統―――

伊勢型紙

桜映画社1977年作品

企画＝文化庁　脚本・監督＝村山英治　撮影＝金山富男　音楽＝山内忠　解説＝伊藤惣一　出演＝宮原敏明・六谷進一（錐彫）、長谷川重雄（突彫）、中村勇二郎（道具彫）、児玉博（縞彫）、城之口みえ（糸入れ）、清水幸太郎（長坂中型）、小宮康孝（小紋染め）　カラー　29分

〈かいせつ〉

三重県鈴鹿市にある白子、寺家の両町は、江戸時代の昔より染物の模様の型紙作りに伝統を持つ土地であった。和紙を柿渋で貼り合わせる地紙作りに始まり、彫刻刀で様々な模様を彫っていく。それらの技法は錐彫り、突彫り、道具彫り、縞彫りと別れ、切りきざまれた紙を固定するための糸入れをもって完成される。数百年にわたって職人たちが競って彫りあげたこれらの型紙歴史と技術が、実存する職人の手仕事を通じて描かれている。

藍に生きる

北東映画社1970年作品

企画＝宮城県文化財保護協会　カラー　26分

〈かいせつ〉

藍染は、現存する日本最古の染色技法で、民族資料として学術的にも貴重な価値を持つものである。この作品では、この道一筋に80余年、藍染に生きる千葉あやのさんの姿を、藍や麻の生育から麻糸を作り、染める布を織ってそれを染めあげるまで、藍染のすべてを描く。

蒔　絵――松田権六のわざ

日経映画社1972年作

企画＝文化庁　製作＝佐藤一郎　脚本＝北條明直　演出＝小谷田亘　撮影＝森康　音楽＝広瀬量平　解説＝平光淳之助　カラー　31分

〈かいせつ〉

重要無形文化財に指定されている松田権六氏の、蒔絵の技法を8ヵ月にわたって記録した作品。日本個有の漆を使った伝統工芸品《蒔絵横に四十雀模様二段卓》の製作過程を通じ、青貝蒔きから出発して、金粉蒔え、漆固め、更に平文、高蒔、らでん、バチル、練り書き、白壇塗りといった古典技術の説明がなされる。そしてそれらを縦横に駆使してみごとに二段卓を完成する松田氏の姿が、刻明に描かれた作品である。

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇劇映画のみを重要視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には〈珠玉の短篇〉という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会史的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇劇映画には見られない別の優れた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後1時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1979年6月　**フィルムセンター**

★先着順にて定員239名に達し次第入館を締め切ります。開館は12時30分。他の特集上映とは全館入替え制になります。

一般200円・学生140円・小人100円

7月7日(土)　午後1時開映

――海――

マリンフラワーズ

—腔腸動物の生活圏—

東京シネマ新社1975年作品

製作＝岡田桑三　監督＝岡田一男　撮影監督＝西山東男　マクロ撮影＝並木菊雄　谷口常也　音楽＝宮本光雄　解説＝平光淳之助　カラー　30分

〈かいせつ〉

人類が地上に現われるよりはるか以前、10億年も前から生存し続けているのが、クラゲ、ヒドロゾア、サンゴなどの海中生物である。この作品は、われわれの肉眼ではとうてい観察することのできないさまざまな海中の腔腸動物や有櫛動物を海中と水槽の双方で撮影したもので、これを通じて、海中生物が自然環境に対して、どのように適応しているかが理解されるであろう。なお、題名の〈マリン・フラワーズ〉とは、海の腔腸動物が、地上の花によく似ているためにつけられた名前である。

うず潮の海に架ける

—大島大橋上部工—

山陽映画1976年作品

企画＝日本道路公団　製作＝中島正樹、関口直久　脚本・演出＝立岡脩二　撮影＝小泉福造、本地攝　音楽＝深沢康雄　解説＝和田篤　カラー　35分

〈かいせつ〉

10ノットにも及ぶ速い潮流と闘いながら、大島大橋の上部架設が完了した。この大橋は、山口県屋代島を本土と結ぶもので、その全長は、1,020mに達する。工事の作業は、下部工に続いて上部工を、3,000トンのクレーン船で側空間に架設するという一括架設工法で進められる。橋が閉合されるまでを、アニメを含めて記録しているものである。

南太平洋の漁法

電通映画社1976年作品

企画＝沖縄海洋博住友館委員会　制作＝近藤和三郎、町田圭子　脚本・演出＝藤久真彦　撮影＝黒川ハルオ、中野修三、柴保　音楽＝スクリーン・ミュージック　解説　篠原大作　カラー　28分

〈かいせつ〉

沖縄海洋博をきっかけにして取材、撮影されたフィルムのひとつである。仏領ポリネシア諸島に住む民族の生活は、海と切り離せない。この映画には、彼ら海洋民族の文化の蓄積である、さまざまな漁法が刻明に紹介されている。フアヒネ島のアサリ採りや石組み漁、ランギロア島の槍投漁、また、マウピティ島の全島民600人が参加して行なわれるストーンフィッシングによる海の祭典の模様などが描かれていて見ものである。ポリネシアの島と海の美しさが印象的。

8月4日(土)　午後1時開映

――虫――

自然界のつりあい

—動物の数は何できまるか—

東映教育映画部1972年作品

企画・構成＝布村建　脚本・撮影＝川崎龍彦　監修＝伊藤嘉昭、東京農工大学アメリカシロヒトリ研究グループ　カラー　24分

〈かいせつ〉

一度に大量の産卵をする昆虫も、ある期間の中では、自然界の複雑なメカニズムによってその数を調節されている。これは、アメリカシロヒトリを例にとって、卵から蛹を経て成虫に至るまでの数の減り工合いを追跡調査したものである。孵化した卵は成長するにしたがって、ハチやスズメなどの捕食者にねらわれ、ウィルス、カビなどに冒されて次第にその数を減らし、次世代に残るものは1％にも満たない。なお、この映画の研究調査は、東京農工大学によって行なわれた。

松くい虫の謎

自然科学映画社1977年作品

製作・脚本・演出・撮影＝福田寅次郎　録音＝小川正城　音楽＝岸清　解説＝中村昇　指導＝農林省林業試験場　カラー　20分

〈かいせつ〉

松は、日本人の生活と心に深いかかわりをもってきた。この松を枯死させてしまう原因は、従来松くい虫の食害によるものと考えられてきたが、マツノザイセンチュウの発見によって、これが直接の加害者であることが知られた。マツノザイセンチュウは木材内に寄生する微生物で、一般には観察する機会が殆どないがこの映画はそれを可能にしてくれる貴重な記録である。また、マツノザイセンチュウと共生関係にあるマダラカミキリの生態も描かれていて興味深い。

ファーブル昆虫記の世界

—カリバチの習性と本能—

東映教育映画部1977年作品

企画・構成＝布村建　構成＝川崎龍彦　撮影＝中村洋、川崎龍彦　音楽＝杉田一夫　解説＝草野大悟　監修＝岩田久二雄　協力＝小島圭三　カラー　29分

〈かいせつ〉

世界中で親しまれてきた《ファーブルの昆虫記》の中でも、第2巻・第4巻に記載されているカリバチ（獲物を狩るハチ）の生態は特に興味をそそるもののひとつであろう。日本にも同じようなカリバチの仲間は多く、様々なカリバチの姿を求め、その狩猟や巣作りの様子を記録・撮影して《昆虫記》の感動を再現しようと試みられたのが本作品である。なお、ここに収められたキオビベッコウがクモを攻撃して麻痺させるシーンは、日本で初めて撮影された貴重な記録である。

9月1日(土)　午後1時開映

――空――

集中豪雨

日本技術映画社1969年作品

企画＝科学技術庁　製作＝岩佐氏寿　脚本・演出＝桑野茂　撮影＝大野洋　造型＝アルモ工芸社　解説＝島田良夫　協力＝気象庁気象研究所　カラー　28分

〈かいせつ〉

集中豪雨は、広島県福山市の芦田川の発掘調査で明らかになったように、鎌倉時代のような昔から、極めて大きな災害を日本の国土に刻みつけてきた。集中豪雨が、何時、どこで、どの位降るのかは、現代の科学技術を以ってしても正確に予想できないでいる。映画は、集中豪雨がもたらした数々の災害を歴史的に列挙しつつ、この大降雨をもたらす空のメカニズムに科学的なメスを入れ、さらに国民一人一人の協力の必要を訴えている。

空からみた日本の火山

東映教育映画部1978年作品

監修＝諏訪彰　企画・構成＝布村建　撮影＝吉田嗣郎　音楽＝杉田一夫　ナレーター＝三田松五郎　カラー　30分

〈かいせつ〉

この映画は、日本の代表的な活火山の形と活動の有様を、人工衛生からの記録写真などを含めながら、主として航空撮影によって立体的に記録・構成したものである。南は九州から北は北海道まで日本列島を縦断しながら展開される火山のさまざまな姿は、火山がわれわれの生活に深い関わりをもつことを教えてくれ、同時に、日本列島の全体像とそれを形成したマグマのエネルギーを実感として伝えてくれる。有珠山火口原の新山、桜島の爆発と広大な溶岩流など、興味は尽きない。

宇宙の気象台・ひまわり

岩波映画製作所1978年作品

監修＝気象庁　企画＝日本気象協会　プロデューサー＝片野満　脚本・演出＝榛葉豊明　撮影＝関晴夫　照明＝藤来義門　録音＝桜井善一郎　ナレーター＝竹内三郎　カラー　31分

〈かいせつ〉

世界気象監視計画による5個の静止衛星の一つとして、静止気象衛星《ひまわり》が、1977年7月にケープカナベラルの人工衛星打ち上げ基地から赤道上空に向かって打ち上げられた。この映画は、静止気象衛星の持つ意義と役割を、アニメーションや実験なども加えながら、わかりやすく科学的に解説したものである。“宇宙の気象台”《ひまわり》の、情報を送るしくみ、天気予報の精度を向上させていること、気象観測以外の使命などが紹介されている。

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇劇映画のみを重要視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には〈珠玉の短篇〉という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会史的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇劇映画には見られない別の優れた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後1時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1979年9月　**フィルムセンター**

★先着順にて定員239名に達し次第入館を締め切ります。開館は12時30分。他の特集上映とは全館入替え制になります。

一般 200円・学生 140円・小人 100円

10月6日(土)　午後1時開映

―― 日本をあるく ――

萩―史跡と風光のまち―

読売映画社1969年作品

企画＝萩市、萩市観光協会　製作＝島田昌一　脚本・演出＝落合朝彦　撮影＝渡辺英容　音楽＝深沢康雄　編集＝津崎源二　解説＝平光淳之助　カラー　33分

〈かいせつ〉

山口県萩市は、長州藩毛利公の居城を中心とした城下町で370年の歴史を誇っている。町のあちこちには数々の史跡があり、映画は、城下の大照院、東光寺から海にのぞむ笠山、玉江浦、浜崎等を経巡りながら、さまざまな美術文化財や祭祀・行事を紹介しており、それに伴って萩市が歩んできた歴史の沿革が示される。

また、今日の萩市を描く意図で、特産の夏みかんや、伝統を新しい時代に生かそうと試みる萩焼についても説明する。

唐津―その歴史・技法と鑑賞―

三幸エージェンシー1974年作品

企画＝松浦文化連盟　製作＝青木正吉、竹下明宏　脚本・演出＝落合朝彦　撮影＝阿部直行　音楽＝団伊玖磨　解説＝石野倬　監修＝十三代中里太郎右衛門　カラー　27分

〈かいせつ〉

東の瀬戸と西の唐津は、古くから日本の二大製陶地として知られ、東日本でやきものを瀬戸ものと呼ぶように、西日本ではそれを唐津ものという。北九州唐津は、焼きもので知られる美しい城下町である。この作品は、唐津焼の成立、発展、円熟の歴史的過程を解説しつつ、土探し、成型、絵付、釉薬の調製、施釉、焼成といった複雑で長時間の忍耐を要する製作工程を描写している。古唐津の味わいを再現する中里無庵（無形文化財）の技術が観る者に、土の美しさを教える。

姫路城

記録映画社1965年作品

企画＝文化財保護委員会　製作・監督＝上野耕三　脚本＝北条明直　撮影＝金山富男　音楽＝武田俊一　録音＝東京テレビセンター　カラー　29分

〈かいせつ〉

国宝姫路城は近世日本の生んだ名城として、姫路市の小高い丘の上に昔ながらの姿で今もそそり立っている。映画は先づ、城の立地条件を述べ、次いで城の配置や建てられた目的を歴史的背景を絡めながら説明する。とりわけ、姫路城が防備のために如何に多くの秀れた工夫をこらしているかが、図解を取り入れながら解説されている。さらに、城の外観・内観の美しさを細分化したカットを積み重ねて丹念に描いている。なお、この作品は1965年度芸術祭賞、文部大臣賞、キネマ旬報ベスト・ワン等多数を受賞した。

11月10日(土)　午後1時開映

―― 土に生きる ――

火山灰地

春秋映画1964年作品

製作＝貯蓄増強中央委員会　企画＝榊原六郎　脚本・監督＝浅野辰雄　撮影＝芦田勇　照明＝岸本万平　編集＝阿久津好伸　音楽＝小杉太一郎　語り手＝久米明　カラー　30分

〈かいせつ〉

近代化を着々と進めた日本の農業の中で、もっとも立ち遅れていた地域のひとつが、鹿児島県山間部の山村畑作農業地域であった。鹿児島県は、その県土の過半がシラス、ボラ、コラなどの火山灰土で覆われ、しかも台風災害が多く、不毛の土地であった。唐芋や麦に代るものとして牛の飼育が重要視され、そのために品種改良や牧野造成の努力がなされ、同時に農民の経営意識向上が計られた。

みちのくのりんご

松緑神道大和山映画部1976年作品

企画＝田中康三郎　監督＝田部純正　撮影＝白川栄造、山口典昭　製作主任＝鶴岡耕造　音楽＝小倉尚継、小杉太一郎　解説＝石野倬　カラー　37分

〈かいせつ〉

西洋りんごが津軽地方に根を下してから百年が過ぎ去り、今や青森は世界の五大りんご生産地の一つとして数えられるようになった。全国のりんご栽培量の約半数を占める青森地方で、その農民たちが、厳しい冬のさ中にりんごの樹を雪害から守ったり、またさまざまな病害（モニリア病・腐乱病・斑点落葉病・黒星病等）と闘いながら、手塩にかけてりんご栽培にあたる様子が1年にわたって記録されたものが本作品である。なお、監修を青森県りんご試験場長の福島住雄氏が担当している。

日本の稲作―そのこころと伝統―

英映画社1974年作品

企画＝文化庁　製作＝高橋銀三郎　演出＝青山通春　撮影＝宮下英一、長井貢、千葉寛　音楽＝真鍋理一郎　録音＝赤坂修一　製作担当＝瀧川正年　解説＝竹内三郎　カラー　42分

〈かいせつ〉

日本人は古来から稲作を基調として生活し、文化を培ってきた。神聖で貴重な生命の糧である米にまつわる伝統的な農作業の有様や厳粛な田の神の祭り、豊饒の祈りなどを記録したのがこの映画である。主なる舞台となったのは岩手県江刺市で、ここでは一年を通じての農作業や予祝行事が撮影され、その他全国20数ヵ所を巡って、種々の珍しい風俗・農耕儀礼が取材された。民俗学的にも高い評価が与えられており、1974年度文部大臣賞、キネ旬ベスト・ワン等を受賞した。

12月1日(土)　午後1時開映

★今月の特集は、貯蓄増強中央委員会より寄贈された66作品の中から選んで作ったものです。

― ヨーロッパのくらし ―

西ドイツの市民生活

―働く人々の財産づくり―

インタナショナル映画1971年作品

企画＝貯蓄増強中央委員会　カラー　27分

〈かいせつ〉

西ドイツは戦後、奇跡的ともいえる経済復興を成し遂げたが、この作品は、その裏にある西ドイツの意欲的な経済政策（貯蓄割増金法）や住宅政策（住宅建設割増金法）等を紹介している。また、旋盤工マイヤーさんの家庭に取材して、平均的な西ドイツ市民の生活様式、子供の教育や経済計画などを見せながら、彼らの勤勉で堅実な国民性に言及している。

素顔のイギリス

桜映画社1966年作品

企画＝貯蓄増強中央委員会　脚本・監督＝村山英治　撮影＝江連高元　編集＝沼崎梅子　録音＝岡崎三千雄　音楽＝間宮芳生　解説＝滝沢修　現地協力＝ハワード・照子　カラー　46分

〈かいせつ〉

イギリスは政治的にも経済的にも斜陽の感を濃くしているが、この国を支える中流家庭の人々の生活から良い意味でのイギリス人気質を探り出そうとの意図で製作されたもの。ロンドンから北へ160キロのノオリッチに住む医師のロフティング夫妻とその友人たちの家庭を訪れて、彼らの地味で堅実で保守的で、伝統を重んじ社会奉仕を大切にする国民性や習慣などが明らかにされる。また、子供のテーブルマナーなど、しつけに熱心な親たちの姿が紹介されていて興味深い。

フランスはぶどうの村で

桜映画社1966年作品

企画＝貯蓄増強中央委員会　脚本・監督＝村山英治　撮影＝江連高元　編集＝沼崎梅子　音楽＝間宮芳生　録音＝東京テレビセンター　解説＝川久保潔　カラー　25分

〈かいせつ〉

「禁じられた遊び」等の劇映画でも垣間見ることしかできないフランス農民の姿を、日本人の目から追った記録映画である。フランス農業の概要に触れ、伝統的な村の風景とぶどう酒造りの様子を伝え、労働にいそしむ老若男女の表情を活き活きと捉えている。一方、村に押し寄せる近代化の波と、それに伴う生活様式の微妙な変化を紹介し、その中で老人たちと若者たちがそれぞれに自分の文化を大切に主張しているさまが描かれている。ラテン系国民天性の陽気さが印象的。

東京国立近代美術館　フィルムセンター　中央区京橋3－7－6　☎(561)0823　地下鉄・京橋駅(銀座線)、宝町駅(都営浅草線)下車

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇劇映画のみを重要視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には〈珠玉の短篇〉という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会史的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇劇映画には見られない別の優れた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後1時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1979年12月　**フィルムセンター**

★先着順にて定員239名に達し次第入館を締め切ります。開館は12時30分。他の特集上映とは全館入替え制になります。

一般 200円・学生 140円・小人 100円

1月5日(土)　午後1時開映
——美の伝統——

色鍋島

桜映画社1973年作品

企画＝文化庁　脚本・監督＝村山英治　撮影＝木塚誠一　照明＝山根秀一　編集＝長谷川宜人　音楽＝長沢勝俊　解説＝観世栄夫　カラー　29分

〈かいせつ〉

重要無形文化財に指定された色絵磁器《色鍋島》の歴史と製作過程を追った作品である。陶石を砕き、土にして練り、ロクロにかけ、素焼、下絵付、施薬から窯詰め、焙り焚き、攻め焚き、あげ火を経て窯出しされるまでの見事な分業の様子が入念に撮影されている。色鍋島特有の地肌の美しさを醸し出す柞灰釉(いすはいゆう)や上絵具を精製する今泉家秘伝のタテワケの技法なども紹介されていて興味をそそる。芸術祭大賞ほか多数受賞。

手漉和紙

日経映画社1975年作品

企画＝文化庁　製作＝佐藤一郎　脚本＝北條明直、小谷田亘　演出＝小谷田亘　撮影＝浅岡宮吉　照明＝松田慶治郎　編集＝井上正司　音楽＝湯浅譲二　解説＝和田篤　カラー　30分

〈かいせつ〉

「色鍋島」同様の《伝統工芸記録映画シリーズ》第4作である。大量生産による近代製紙の蔭で、黙々と伝統を守り続けている和紙の技法を紹介したものである。コウゾ厚紙の技術で重要無形文化財越前奉書の保持者となった岩野市兵衛氏と、コウゾ薄紙、土佐典具帖紙造りの代表である浜田幸雄氏の仕事ぶりを比較しつつ、原料の水づけ、釜煮、ちり取り、打解といった作業工程が丹含に描かれている。特に高度な技術を要する流し漉きの場面にはハイ・スピード撮影が用いられた。

彫る、棟方志功の世界

毎日映画社・美術映画製作協会1975年作品

製作＝草壁久四郎　脚本＝杉山義法　製作・脚本・監督＝柳川武夫　撮影＝田中正、粕谷行夫　編集＝鈴木晄　音楽＝小杉太一郎　津軽三味線＝高橋竹山　ナレーター＝鈴木瑞穂　カラー　38分

〈かいせつ〉

日本が世界に誇る芸術家—板画師棟方志功の作品と人となりとを、彼を生んだ青森の風土の中に描き込んだ傑作短篇で、1975年度キネマ旬報ベスト・ワンを始め、数多くの賞に輝いた。棟方板画の鋭い線や艶やかな色彩を微視的に提示しつつ、一方で、彼の一見変人とも見える天衣無縫な日常生活にカメラを向け、その驚くべき創作意欲と美への情熱とをして観る者を感動させる。板画に取り組む志功とねぶたに興じる志功とが高橋竹山の津軽三味線の音の中で溶け合って躍動する。

2月2日(土)　午後1時開映
——雪と氷——

雪の結晶

岩波映画1957年作品

企画＝八幡製鉄　製作＝吉野馨治、渡貫敏男　脚本＝花島政人　演出＝伊勢長之助　撮影＝広川朝次郎　白黒　19分

〈かいせつ〉

1939年、北大中谷宇吉郎博士の指導の下で、東宝映画文化映画部は「雪の結晶」を製作して太平洋学術会議で上映し、ヴェネチア映画祭にも出品した。この演出・撮影に当った吉野馨治は、岩波映画の製作者として1953年にこれを再映画化（演出小口八郎、無声）し、ロンドン国際科学映画会議に出品した。今回上映のものは、これにナレーションを加えた短縮再編集版で、八幡製鉄がスポンサーとなり、〈たのしい科学シリーズ・No.10〉として1958年1月にNTV系で放映された。

雪国をひらく—越後の雪と高速道路—

日本映画新社1978年作品

企画＝日本道路公団新潟建設局　プロデューサー＝坂井健二、大森邦彦　演出＝千原卓司　撮影＝内藤広、相沢有一、榎本秀男　動画＝高田悟　音楽＝寺島尚彦　解説＝伊藤惣一　カラー　26分

〈かいせつ〉

日本で最も雪の多い新潟地方に建設されつつある北陸自動車道・関越自動車道（'83年頃開通予定）に伴う雪氷対策や事前調査を描写した作品である。沿線町村での最大積雪深は、北陸自動車道沿線で2メートル以上、関越自動車道沿線で3メートルを越え、種々の雪害をもたらしているため、技術スタッフは、路線沿いの積雪深調査から着手し、標識テスト、除雪試験、消雪・融雪施設のテスト、なだれ調査、階段工・防雪柵・立入防止柵のテストなどを重ねるのであった。

流氷—そのなぞを追って—

鹿島映画1970年作品

企画＝文部省　製作＝岩佐氏寿　脚本・演出＝辻功　撮影＝大野洋　解説＝及川甲子男　指導＝北海道大学低温科学研究所付属流氷研究施設　カラー　28分

〈かいせつ〉

北大低温科学研究所付属流氷研究施設の科学者達が進めてきたオホーツク海の流氷研究活動をわかり易く解説した映画である。オホーツク海は凍結する海としては最南に位置するが、一方同緯度にある、千島列島をはさむ太平洋側は凍らない。科学者達は流氷の観測活動を通じてこの謎に挑んでいる。流氷をサンプル採取してその結晶構造を観察したり、空からの航空撮影を、流氷観察用のレーダー像と比較したりする。またシネ・カメラの微速度撮影によって流氷の巨視的な動きが明らかにされている。

3月1日(土)　午後1時開映
——アニメーション映画 国際映画祭受賞作集——

人間動物園

久里実験漫画工房1961年作品

作画・演出＝久里洋二　音楽＝武満徹　声＝水島弘、岸田今日子　カラー　2分

〈かいせつ〉

オリに入れられた男が女にいじめられる話で、〈クラップ・ボーカリズム〉と呼ばれる武満徹の音楽が印象的。'62ヴェネチア国際記録映画祭青銅賞、'63アヌシー国際動画祭特別審査員賞などを受賞。

花ともぐら

学研AV局1970年作品

製作担当＝神保まつえ　原作＝星新一　脚本＝岡本忠成、坂間雅子、来道子　演出＝岡本忠成　音楽＝広瀬量平　ナレーション＝岸田今日子　カラー　15分

〈かいせつ〉

星新一の《花とひみつ》の人形動画化。〈ロボット・モグラ〉が世界中を花一杯にする話で、第22回ヴェネチア国際児童映画祭銀賞を受賞した。

てんまのとらやん

ビデオ東京1971年作品

企画＝大村英之助　脚本＝加藤盟　演出＝中村武雄、河野秋和　撮影＝高森菱児　音楽＝宮崎尚志　カラー　17分

〈かいせつ〉

天満のトラやんの楽しい冒険物語。第7回モスクワ国際映画祭児童映画部門銀賞および同ピオニール音楽賞受賞。

道成寺

川本プロ1976年作品

製作・脚本・演出＝川本喜八郎　撮影＝田村実　音楽＝松村禎三　カラー　19分

〈かいせつ〉

安珍清姫の悲しい怨念物語として知られる《道成寺》を人形アニメーションで描いた作品。'77年度アヌシー国際動画映画祭でエミール・レイノー賞を受賞。

ピカドン

スタジオ・ロータス1979年作品

制作＝林大三郎　脚本＝木下小夜子　原画・監督＝木下蓮三　撮影＝磯辺覚　音楽＝小六礼次郎　カラー　10分

〈かいせつ〉

戦争体験のない子供達にも原爆の恐ろしさを教えてくれる作品。'79年アヌシー国際動画映画祭審査員特別賞受賞。

野ばら

東京中央プロ1977年作品

製作＝庄司洵　原作＝小川未明　脚本・演出・映像＝高橋克雄　音楽＝林千尋　朗読＝七尾玲子　カラー　19分

〈かいせつ〉

小川未明の同名原作による人形アニメーション。'79年国際赤十字映画祭国際児童年記念レオニード・モギー大賞受賞。